

『隣蘇園蔵書目録』及び其の研究

唐 剛 卯

湖北省博物館

楊守敬、字惺吾、号隣蘇、湖北宜都人。清・道光十九年（1839）に生まれ、民国四年（1915）に亡くなった。著名な歴史地理学者、古籍版本学者、書家、蔵書家である。著書は『日本訪書志』、『留真譜』、『水経注疏』、『歴代輿地図』など。『古逸叢書』の出版編集を主宰したこともある。

『隣蘇園蔵書目録』は湖北省博物館の蔵品で、全部で十冊あり、線装墨書の抄本である。長さ29.5センチ、幅18センチ。用紙は隣蘇園専用の印刷用紙で、紙に赤い枠が印刷され、上下に分かれて、全部で八枠である。枠の長さは20センチ、総幅16センチ、枠幅は1.9センチ。目録には編纂者の名前は明記されていなく、筆跡から見ると、楊守敬の書いたものではないが、少量の楊守敬の注釈も見られる。原稿用紙は「隣蘇園」の原稿用紙を使ったことから、編纂者は楊氏の弟子または家族であることは推測できる。目録の内容には具体的に「前楼」や、「柏木箱」と記録していることから、目録の整理、登録は湖北黃崗に務めた時の楊氏家宅、即ち隣蘇園であることがわかる。この園名は「唐宋八大家」の一人蘇東坡が黃州に流されたときに作った「赤壁賦」の東坡赤壁に隣接することから由来したもので、楊氏は晩年この名前を使って、自ら「隣蘇老人」という号を使った。

『隣蘇園蔵書目録』は書籍部、仏経部、字画部、法帖部などの部分に分かれるが、編集したときに完全にこの分類を使ったわけではなかった。例えば書籍部は経、史、子、集の分類で編目するよう努めたが、元々保存するときは経、史、子、集の分類で置いていなかった為、具体的に目録編成の際は、保存する場所によって分類、整理を行い、やむを得ず某楼、某箱の形式で登録するようになった。こうして、経、史、子、集によって分類する方法はそれぞれ個別に行ったり、千字文によって番号を付けたり、体裁上大きな問題を残している。内容も屢々修正されたことから、この目録は草稿であることも窺え、その目的は、蔵書の日常使用の上で便利さの為に整理するところにある。この目録は書籍の出入り帖の性質を持ち、この点は目録のなかに見られる多くの符号から伺うことができる。例えば、「,」「0」、又は朱色の「,」「0」などで照合することを示したり、大量の注釈を加えたりする。また第一冊の書籍部を例にしてみれば、「己賣」（売却済み）、「取来」（取ってきた）、「蒯光典借去」（蒯光典氏が借りていった）、「己帶京」（北京に持っていった）、「辛亥（1911）冬月（11月）賣於傅沅叔60元」（辛亥冬月60円で傅沅叔に売った）などの注釈が見られる。

ある本の重要性或いは特徴を強調するため、『隣蘇園蔵書目録』は「古抄本」、「初印本」、「宋本」、「元本」、「足本」、「明刊本」、「明倣宋本」などの木印を使い、朱印を捺した。その中に「日本古刻本」、「日本古抄本」の二類は日本から収集した殆どの図書の条目に捺されていた。ところが、これらの印を実際使用する際、捺印すべき書籍に全部捺印したわけではなかった。例えば第一冊書籍部のある条目には、墨書で「元至順槧玉篇」、「元槧玉篇」などを明記したにもかかわらず、「元本」の印は捺されなかった。

注釈文の中に明確に年代を記録している。最も早いのは例えば「己酉（1909）虫月賣於萃文齋（己酉虫月に萃文齋に賣る）があり、最も遅いのは例えば「送賣於甘翰臣 壬子（1912）十月刀（初）一」（甘翰臣に賣る 壬子十月刀（初）一）がある。この年代から、この目録の編撰年代は己酉年、即ち1909年より早いことと、少なくとも1912年にまだ使用中であることがわかる。

一 楊氏蔵書の経歴

楊守敬の蔵書家としての活動は、清・光緒六年（1880）四月に清政府駐日本公使館の随員として日本の東京に滞在した期間から始まった。当時の日本は明治維新で、古代文化が重要視されないという社会環境にあった。こうしたなか、各種類の古籍は日本の市場に充満し、安く販売されていた。楊守敬は『日本訪書志』の縁起で次のように述べた。

日本維新之際、頗欲廢漢学、故家旧蔵、幾於論斤估值。

日本維新之際に、強く漢学を廃しようとした。故に家の旧蔵漢籍は、重さで計って売られるぐらいだった。

また、袁同礼は『観海堂書目序』で次のように述べている。

（日本）挙国士大夫、棄古書如敝屣。

（日本の）全国の士大夫は、皆古書を破れた草履のように捨てていた。

こうした状況で、同年の十二月楊氏は友人李蕙客の手紙にこのように言っていた。「日本古籍甚多、所見有唐人本『玉篇』、又有釈慧琳『一切経音義』、隋杜台卿『玉燭宝典』、皆鈔本、其餘秘笈尚夥。隋唐以下金石文字、亦美不勝収。彼国自撰之書、与中土可互証者尤多」（日本の古籍は甚だ多い。私が見た中で、唐人の『玉篇』、釈慧琳の『一切経音義』、隋の杜台卿の『玉燭宝典』などがあり、皆鈔本である。その他の秘笈はまたおびただしい。隋唐以後の金石文字も、素晴らしいものが多すぎて、鑑賞しきれない。日本人が書いた書籍の中に、中国とお互いに照合しあうものは尤も多い）。楊守敬は遂に中国古代の散逸した書籍を収集するよう志した。当時中国の文人学者はこの言葉を聞き、李慈銘のように「聞之神往、有懷鉛浮海之思」（これを聞いて憧れはするが、砲丸を抱いて海に飛び込むような思いだ）と述べた人も

いたが、これを聞いて激励の言葉を述べた人もいる。例えば黄遵憲は『日本雜事詩』の注に次のように書いた。「先是、先生初至日本、嘉応黄公度方任使館參贊、告以中土珍本古籍、唐抄宋刻、時復邂逅相遇、勸其留意搜輯、先生因有日本訪書之学」（この前、先生（楊氏）が初めて日本に来たとき、嘉応黄公度は使館參贊に任命されたばかりで、唐、宋の抄本、刻本など中国の珍本古籍があることを告げた。ある時、偶然に会ったときに、先生に留意して収集するよう勧めた。故に先生は日本訪書の学を著した）。楊氏自撰の年譜に、当時の様子について、楊守敬は次のように述べた。

先是、余初到日本。遊於市上、賭書店中書、多所未見、雖不能購、而心識之。幸所携漢魏六朝碑版、亦多日本人未見；又古錢古印為日本人所羨、以有易無、遂盈筐筥。及黎公有刻書之議、則日日物色之、又得日人森立之『經籍訪古志』抄本。其時立之尚存、乃按目索之、其能購者、不惜重值、遂已十得八九、且有為立之所不載者數百種、大抵醫書類為多、小学類次之。於是由黎公擇取付梓人、囑守敬一人任之。守敬日与刻工磋擇磨善惡、又応接日本文学士、夜則校書、刻無寧日、日本詫為万夫之稟、且上新聞報中。是時、与日本文人往来最密者嚴谷修（六一）、日下部東作（鳴鶴）、岡千仞（振衣）。

この前に、私が初めて日本に着き、町をぶらぶらしたら、本屋においてある本の多くが見たことのない本であることに気づいた。買えないけれど、内心とても気に入った。幸い自分が持っていった漢、魏、六朝の石碑版本の多くは、これまた日本人が見たことのないもので、また古錢、古印なども、日本人が欲しいものである。お互い持っているもので持っていないものと交換し、遂に荷物がいっぱいになった。そこで黎公から本を刻印する提案があり、これを受けて日々物色し、又森立之の『經籍訪古志』の抄本を手に入れた。其の時目録はまだあり、目録に従って書籍を求めた。買えるものは、高いお金を惜しまずに買い、遂に八九割を手に入れた。また目録に載せていないものが数百種あり、たいいてい医書類が多く、小学がこれを次ぐ。それで、黎公に出版者を選んでもらい、すべてのことを守敬一人に任せた。守敬は昼に刻工に切磋するかたわら、日本の学者を応対し、夜は書籍の校正に励む。一日でも休む暇がなかった。日本ではこのことについて皆の好評を受け、新聞にも報道された。この時に、日本の文人と交友関係が最も親密であった者は、嚴谷修（六一）、日下部東作（鳴鶴）、岡千仞（振衣）である。

この後、楊守敬先生は日本で古籍の収集と出版に力を注いだ。彼は『日本訪書志』の縁起にこのように書いた。

余生僻陋。家（渺）蔵書、目録之学、素無淵源。庚辰東來日本、念歐陽公百篇尚存之語、頗有搜羅放佚之志、茫然無津涯、未知佚而存者為何本、乃日遊市上凡版已毀壞者皆購之、不一年、遂有三万餘卷、其中雖無秦火不焚之籍、實奮然未献之書。

私は生まれながらの僻み根性で、家に蔵書は甚だ少ないし、更に目録の学問については淵源がない。庚辰に日本に来て、欧陽公の百篇はまだ伝存していることを聞いて、散逸

した書籍を収集する気持ちは強かった。が、茫然として当てるところがなく、散逸したもので伝存されたのはどんなものかについても分からなかった。それで毎日街をぶらぶらして、版が既に壊れたものがあれば全部買い、一年も満たない間に、遂に3万巻餘りになり、其の中には秦の「焚書坑儒」を免れたような古い書籍はないが、実に貴重な書籍ばかりである。

楊守敬は古籍を収集すると同時に、清政府の駐日公使黎庶昌の指示で、古籍の整理、出版の作業を進めた。光緒十年に、楊守敬が実際主宰した『古逸叢書』は日本で刻印を完成した。日本に伝存する中国の古籍二十六種を含めた、凡そ二百巻の叢書である。これは世界中で反響を起こした。楊氏は自分で書いた年譜でこのように書いていた。「古逸叢書已成、督印百部、黎公以贈当時顕者、皆驚為精絶」（古逸叢書は既に完成、百部印刷させ、黎公はこれを当時の名士に贈った、皆その見事なことに驚いた）。また金武祥は『粟香三筆』でこのように述べた。「当時の人々は『古逸叢書』を珍しいものと見て、皆これを欲しがっていた」。後に、楊氏は日本での訪書経過によって『日本訪書志』と『續志』の草稿を書き始めた。この間に楊氏は感慨に耽った。『楊惺吾先生年譜』（呉天任撰、台湾藝文印書館、1974年）に引用した容肇祖の『楊守敬小伝』に所載の楊守敬が友人黄蓼宛の手紙の内容を転引する。

学問一事、敬以前皆毫末聞。自来此因縦覧数万巻書、始知此中門徑、所刻書二十餘部、又為日本訪書志廿餘巻、若明年無他故、此身必当有五百年之称、惜未得与仁兄朝夕相見、同此樂也。弟現在所蔵書已幾十万巻、其中秘本、亦幾万巻、就中有宋版蔵書、可以相並、其他皆不足言也。自幸此身有此奇遇、故一切富貴、皆漠不関懐、計明年之冬、当返国赴黄崗任、他日必邀仁兄一賞奇也。

学問のことは、私は今まで少しも分からなかったが、此処に来てから、数万巻の書物を縦覧することがあって始めてこの道を知り、刻印した書籍は二十餘部あり、又日本訪書志二十餘巻を書いた。来年に他の変動がなければ、これは五百年の歴史に残るような書物になる。惜しいことに、仁兄と朝夕会うことができず、此の楽しみを共に享受することができない。私が現在所蔵する書籍は既に数十万巻にのぼり、其の中に秘本も幾万巻になる。中国には宋版の蔵書はこれと比べることができるが、其の他のは皆比べものにならないものである。私は自ら此の奇遇を最も幸運に思っているので、一切の富貴にはまったく関心を持っていない。恐らく来年の冬には国に帰って、黄崗に赴任に行くが、後日必ず仁兄にこれらの珍しい書籍を見せたい。

手紙の中に、「弟現在所蔵書已幾十万巻、其中秘本、亦幾万巻」と書いたことから、楊氏が日本で収集した古籍の数量の多さに驚くだろう。光緒十年（1884）、楊守敬「四月差満、五月束載所得古籍帰国」（四月に任期満了、五月に収集した古籍を載せて帰国した）。帰国後、彼は湖北黄崗に戻り、教諭の職についた。その収蔵した古籍も黄崗に運送された。光緒十四年（1888）、楊氏は黄崗に、蔵書楼を建てた。このことは楊氏自撰の年譜に記録されている。

戊子、五十歳。築黄州「隣蘇園」以藏書、其城北即東坡赤壁、故以名。

戊子年、五十歳。黄州に藏書のために「隣蘇園」を建て、其の城北は東坡の赤壁である故に、この命名をした。

この後楊守敬は自ら隣蘇老人と称するようになる。が、隣蘇園内の藏書楼は別に名称があり、「広文書楼」という。陳三立の『宋槧黄山谷内外集題辞』にこのように述べている。

光緒十九年、……其秋、遊黄州諸山、遂過楊惺吾広文書楼、遍覽所藏金石秘籍、中有日本所得宋槧黄山谷内外集、為任淵史容注、据称不独中国未經見、於日本亦孤本也。

光緒十九年、……其の秋に、黄州の山に遊びに行き、遂には楊惺吾の広文書楼に寄り、その金石秘籍の所藏を遍覽した。中には日本で得られた任淵史容注釈の宋槧黄山谷内外集があり、中国で見たことがないだけでなく、日本においても孤本であると云う。

当時楊守敬の藏書規模は「三百棚」と言われるぐらい大きい。周伯晋の『過黄州宿楊惺吾隣蘇園書楼』の詩から伺うことができる。

宋槧唐彫三百架、独専尤物時人罵。興来堰筆作狂書、行歌乱石荒花下。西山如客輯書楼、楼上老儒無所求。何須蹀躞金門道、得住高楼吾既休。

以上述べてきたように、楊守敬の主要な藏書は日本からの収集であり、その収集の過程は前述した通りである。その中に、中国から日本に流入した中国で印刷された古籍もあるし、日本で印刷、又は写した中国と日本の古籍もある。楊守敬が著した『日本訪書志』には次のように述べている。

余在日本所得古鈔佛經不下六七百卷、其中有唐人書写者、有日本人伝録者、工拙不一；而時有出於高麗藏、宋藏、元明藏之外、有島田□□□等好佛書、為言：此皆其日人入唐求法僧所国者。

私は日本で得た古鈔佛經は六、七百巻を下らない、其の中に、唐人が書いたものもあり、日本人が伝録したものもある。印刷の出来はばらばらである。時には高麗藏、宋藏、元明藏の他に、島田□□□等のような佛書を好む人もいる。言う：これは皆日本人が唐に求法に行った僧侶が刻したもの。

二 楊氏藏書の行方と散逸

楊氏の藏書は清の光緒十年（1884）に、楊守敬は「五月東載所得古籍帰国」（五月に得た古籍を載せて帰国した）。その古籍は黄崗に運送される。前述したように、光緒十四年（1888）「築黄州「隣蘇園」以藏書」（藏書のため、黄州の「隣蘇園」を建てた）。ここは楊氏藏書の帰

国後の第一拠点である。

また、楊氏自撰の年譜によると、楊氏は光緒二十五年（1899）、当時湖廣総督張之洞の要請を受け、黄崗を離れ、武昌の両湖書院に教習の職についた。光緒二十八年（1902）、この年に書院は学堂に改められ、これと別に勤成学堂が成立した。楊氏は武昌勤成学堂の総教長に命じられた。この間に、楊氏蔵書はその量が多かったのと、住居も粗末なところであったため、書籍は武昌に運ぶことができなかつた。彼の年譜にこのように記録している。

……而議築学堂於花園山、余因買橫街舖屋暫居。九月、買菊湾破屋。略修飾而移居焉。
……そこで花園山に学堂を建てることを検討し、私はそのため街の舖屋を買い、暫く住んだ。九月に菊湾で見窄らしい家を買ひ、少々修飾してここに移住した。

住居の条件はこのようなものなので、楊氏蔵書は武昌に運搬できなかつた。これは彼の個人研究にとっても、本の収蔵にとっても大きな不便をもたらした。そこで、光緒二十九年（1903）、楊氏は菊湾で書樓を建てた。この書樓ができてから、楊氏の主要な蔵書は黄崗から武昌に移るはずであつた。この後、宣統元年（1909）、菊湾の家を修理した。これについて楊守敬は年譜で多少言及した。「菊湾老屋朽壞將傾、改作至十二月成」（菊湾の老屋は朽ち壊れ、傾こうとした、修理作業は十二月までに完成した）。いわゆる老屋は前買ったという「菊湾破屋」を指すが、それに対して新屋があるべく、つまり新修した書樓である。

以上述べてきたように、楊氏の蔵書は1903年前後に武昌菊湾に移し、ここは楊氏蔵書帰国後の第二の拠点である。

1911年武昌の武装革命が起り、武昌城内の秩序は混乱し始めた。楊氏は上海に避けたので、武昌の楊氏蔵書は人に保管を依頼せざるを得なかつた。陳三立『宜都楊先生墓志銘』には次のように書いた。「（楊守敬）歲辛亥、武昌禍起。跳出走上海、鬻書為活」（辛亥年間、武昌で革命が起り、楊守敬は上海に逃げ、本を売って生計を維持した）。彼は自分の年譜に次のように詳しく記述した。武昌の革命が起ってから「有勸遠避者、……吾書籍甚多、萬不能遷出；況民軍示文、秋毫不犯、遂堅持不出城主意」（遠くへ避けるよう進められたが、……私の蔵書が多すぎて、これを遷移することができない。それに民軍は少しも犯さないと明示したので、遂に武昌城を出ないことに決意した）。しかし、十月十二日に楊守敬は銃を持った悪人に遭遇したので、やむを得ず急いで上海に逃げた。家にある書籍の管理は全部使用人に任せた。上海についてから始めて日本の寺西秀武氏の要請で黎都督は既に楊守敬の書籍を保護しようという告示を楊宅に貼り、室内にも封印の紙を貼ったことを知った。年譜にこれについてこのように記録した。

照得文明各国、凡於本国之典章図籍、罔不極意保存、以為国家光荣。茲查有楊紳守敬、藏古書数十万卷、凡我同胞、均応竭力保護、如敢有意図損毀及盜窃者、一經查覺、立即拿問治罪。楊紳系篤学老成之氏、同胞咸當愛敬、共尽保護之責、以存古籍而重郷賢……
各文明国を見て、凡そ自国の典章図籍に、極意にして保存に務め、これをもって国家の

光栄と為す。今楊紳守敬が、古書を数十万卷所蔵することが分かり、我が同胞は皆力を尽くしてその保護に務めるべき、所蔵書籍に損害を与えたり、窃盗をしようと図るものが居れば、発覚する次第、直ちに罪を問う。楊紳は博学、老成の方で、同胞は皆敬愛をすべく、共に古籍保護の責任を果たし、これをもって古籍を保存し、郷の賢士を大切に……

以上の内容から、当時の武昌軍政府の中国伝統文化に対する保護政策の一斑が窺える。これで楊氏の蔵書は安全に居られた。しかし当時南北軍は武漢で揚子江を隔てて対峙していた。楊守敬はこれについて大変心配し、その心配の気持ちは年譜から窺える。

……吁！世之蔵書者、大抵席豊履厚、以不甚愛惜之錢財、或值故家零落、以賤值捆載而入、守敬則自少壯入都、日遊市上、節衣齋食而得；而在日本、則以所携古碑、力始能入厨者。天鑑艱難、當不使同絳雲一炬！若長此不靖、典籍散佚、則非独吾之不幸、亦天下後世之不幸也。涕零書此、知我者、其勿以不達笑我。

……世の蔵書者たちは、大抵お金持ちで、惜しまない金で書を買うか、或いは古い家が没落する時に、その家の書籍を安値で大量購入する。守敬は若い時に町に行き、日々町にぶらぶらして物色した書籍は、皆衣食を節約して得たものである；そして日本では、持っている古碑で交換した。その収集の難しさを神様が察知してくれるなら、戦火に焼却するのを免れてくださるはず。若しこの状況が長く続くなら、典籍が散逸することは、私個人の不幸に止まらず、亦天下、後世の不幸になる。涙を流しこれを書き、そういう状況になる場合、私を知る者は、(書籍の保存)ができなかったことを笑わないでください。

こうして、楊守敬の蔵書は1912年上海に移った。楊氏蔵書から見限り、蔵書の場所は「観海堂」と呼ばれるところにある。恐らく上海に居たときに書籍はここに置いていたと思われる。ここ「観海堂」は楊氏蔵書帰国後の第三の拠点である。楊氏年譜によると、「丙午、六十八歳四月至上海、寓居甘君翰臣家。時翰臣為怡和洋行総弁、酷愛余書法」(丙午年、六十八歳の時、四月に上海に至り、甘君翰臣の家に寄宿していた。当時翰臣氏は怡和洋行の総弁を務め、私の書を好んでいた)。ここから甘翰臣と楊守敬の交友関係が窺える。楊氏が上海に行ったとき、甘家に泊まったに違いない。但し書籍は上海についてからどうなったのか、これについては今後の考察を待とう。

民国が成立してから、1914年、楊守敬は参議員になり、北京に赴任した。呉天任が書いた『楊惺吾先生年譜』(台湾藝文印書館、1974)によると：

先生常以名山之業為念、因将在滬蔵書、次第運京、費用由政府資之。在京寓西城南魏胡同。

先生は常に名山の業を念頭におき、上海にある蔵書を、次第に北京に移した。費用は政

府が出資して助けた。蔵書は北京西城の南魏胡同に置いた。

楊守敬の蔵書はこのとき政府の力を借りて北京に移り、南魏胡同に置いたことが分かる。ここは楊氏蔵書の第四の拠点になる。この後、1915年、楊守敬先生は逝去した。

前引の年譜によると、1919年先生が逝去して、その四年後に、觀海堂の蔵書は傅沅叔の仲介で、政府に売却された。このことについて、何澄一が編纂した『故宮所藏觀海堂書目』（民国21年北平故宮博物院図書館印刷発行）に載せた、袁同礼の序言に詳しく記録されている。

我国久佚之書、頼楊氏之力、復見於中土、則楊氏保存古籍之功殊不可没也。民国乙卯、楊氏帰道山、享年七十有六。其蔵書全部以国幣三万五千元鬻諸政府。己未、徐總統以一部分撥交松坡図書館、所餘者儲於集靈園、丙寅一月、撥歸故宮博物院保存、藏於大高殿、為故宮図書館分館。己巳冬移於壽安宮、專室度藏、公開閱覽。今就故宮所藏者由何君澄一編成簡目、聊備稽考而已。窃念此録雖非觀海堂蔵書之全部、然所著録為其他書目所不及者有二：一曰：古鈔本、二曰：医書。日本所傳古鈔本、多存隋唐之旧、其価値當出宋元旧刊之上、今岿然独存、而為一般収蔵家所未見。至医籍秘本、大抵皆小島学古旧蔵、学古三世以医鳴於日本、蔵書之富、罕有其匹。今觀其所収者、多為各書目所未載、寧非書城之巨封、文苑之宝蔵耶？

我が国が久しく散逸した書籍が、楊氏の方で再び中国に見られるようになるのは、楊氏の古籍保存の功績に帰する。民国乙卯年に、楊氏が逝去し、享年七十六歳。其の蔵書の全部は国幣三万五千元で政府に売られた。己未年、徐總統はその一部分を松坡図書館に交付し、余った部分は集靈園に保管し、丙寅年一月に、故宮博物院に交付して、大高殿に保存し、これを故宮図書館の分館と為す。己巳年の冬に壽安宮に移り、専門の個室に保存し、公開閱覽が可能になる。今、故宮に所蔵する古籍について、何澄一氏は簡単な目録を編成し、参考に備えるばかりである。此の目録は觀海堂蔵書の全部ではないけれど、其の記録の内容に他の書目が比べられないのは二つある：一つは古鈔本、もう一つは医書。日本に伝存する古鈔本の多くは、隋唐の旧本であり、其の価値は宋元の旧刊より高いはず。これは今良い状態で保存されているのは、恐らく一般の収蔵家は見たことのないことであろう。医籍の秘本に関しては、大抵皆小島学古氏の旧蔵からのもので、学古氏は三世とも日本では医術で名を知られている。その蔵書も他に匹敵するものがないくらい多い。今その収集したものをみて、多くは各書目に載せていないものである。これは書城の巨封、文苑の宝蔵ではないだろうか。

しかし、楊氏蔵書はやはり完全に保存されていなかった。その一部分は「松坡図書館」に属し、この部分は当時の学者たちが一般書籍と見たものだろう。もう一部分は故宮博物院に属し、最初は「大高殿」に、後に「壽安宮」に保存し、この部分は楊氏蔵書の精髓と思われる。

建国前に、故宮博物院に所蔵した書籍は台湾に移り、現在台北故宮博物院に保存されてい

る。松坡図書館の書籍は中国の国家図書館——北京図書館に帰属するようになり、現在は既に各類の図書の中に混在している状態である。

以上、楊氏蔵書の大体な動きを述べてきたが、ここで特別に指摘したいのは、楊守敬が亡くなってから、楊氏の後代は全部の書籍を当時の北洋政府に売却したわけではなかった。楊家に一部分の古籍が残されていた。特に巻物の手抄本古籍と文書、この部分は1965年以前に既に流出があったが、1965年以降、楊守敬先生の孫、楊先梅先生は家に保存している残りの古籍を全部湖北省博物館に寄贈した。

以上述べてきて分かるように、楊守敬先生の蔵書は、まさに彼自身が語ったように、「一切富貴、皆漠不關懷」、「節衣縮食而得」、「天鑑艱難」で収集した蔵書である。これらの蔵書は、楊守敬の生前に既に何回も遷移を経験し、戦火の危険を冒した。楊氏が逝去したあとも、大陸、台湾各地に散在している。その中に散逸したものの多くは現在すでに見ることができない。楊守敬が「涕零書此」（涙を流し此を書いた）時の気持ちを思えば、思わず感慨に耽った。

こうして、楊氏蔵書の詳しい状況を把握するためには、楊氏蔵書の書目の編撰が当面の急務であることは、言うまでもない。

三 楊氏蔵書目録の編纂

楊氏蔵書は最初から注目を浴びてきた。しかし、楊氏蔵書はこれほど豊富だったにもかかわらず、未だに満足できる目録を編纂、公開されたことがなかった。その為、楊守敬の生前には一般の人はその詳しい事情は分からなかった。楊氏が逝去してから始めてその蔵書の目録を編纂するようになった。次に楊守敬蔵書目録の編纂状況について述べる。

現在既に公開刊行した楊氏蔵書の目録は次の一種しかない。

袁同礼序、何澄一編『故宮所蔵觀海堂書目』

民国21年北平故宮博物院図書館印行

その他に関係する書籍は次のものがある。

1. 『古逸叢書』二百巻 光緒十年（1884年）
2. 『日本訪書志』十六巻 光緒十年（1884年）成、二十七年（1901年）刻
3. 『留真譜』十二巻、『續編』十二巻 光緒二十七年（1901年）刻
4. 『日本訪書志補』王重民撰故宮図書館蔵輯（1930年）活字印刷

以上述べてきたことから、各種の目録は様々な理由で、完全な目録ではないことが分かる。例えば『古逸叢書』、『日本訪書志』の中に載っている相当の数の古籍は楊守敬が収蔵したものではない；また『留真譜』に載っている書籍などは基本的に楊守敬の所蔵ではあるが、古籍が少ない。いずれにしても楊氏蔵書の全貌を見ることができない。『故宮所蔵觀海堂書目』の場合は、わりと全面的ではあるが、蔵書のすべてを反映したわけではなく、松坡図書館の一部は欠けているし、楊家に残った一部の古籍も含まれていない。

楊氏蔵書目録を研究する場合、まず最初に指摘すべき事は、前述したように、楊氏が目録編成の前に、日本で既にその蔵書の最も主要な部分を整理し、それをもとに『日本訪書志』等の原稿を書いたことである。光緒二十三年（1897）五十九歳の時に、楊氏は再びその蔵書の整理作業を始め、これも楊氏の年譜に記録されている。

六月、帰黄州『隣蘇園』。……自是又理旧業、検点蔵書、擬刻『日本訪書志』及『留真譜』。六月、黄州の『隣蘇園』に帰る。……ここからまた旧業を始め、蔵書を検点し、『日本訪書志』と『留真譜』の刻印を準備する。

帰国して十三年後に、楊氏は始めて正式に書籍を整理する余裕ができた。この作業は又四年続き、清光緒二十七年（1901）に『日本訪書志』の刻印が完成した。『留真譜』も同じ年に刻印、出版した。但し、楊氏蔵書は依然として完全な目録を編纂できなかつた。後に、書籍の一部を売る為に、蔵書目録の編集を始めたが、これは楊守敬が繆荃孫（藝風堂）宛の手紙から伺うことができる。

……再敝処書籍、去冬香帥欲購之、囑抄目録。因敝処書凌雜之甚、囑人檢理、竟不得端緒、故至今已抄得兩分、其中重複缺漏、皆不可用。此非守敬親自費數月之功、不能清楚。今香帥雖入都、其作罷論否、尚無明諭。昨日午帥信來、亦言及欲購我書、但目録未成、万難議價。唯有宋槧全藏六千余冊、是特別度閣。

（『藝風堂友朋書札』上海古籍出版社）

……また私の処の書籍は、去年の冬に香帥はこれを買いたいと言い、目録を作るように言われた。私の処の書籍は極めて乱雑なので人に整理してもらおうとしたが、目鼻がつかない状態だった。故に今二部抄録したが、其の中の重複欠落は多く、皆使えない。これは守敬自ら数カ月をかけてやらないと、整理はできないと思う。今香帥は都に入っているけれど、この話はまだ続くかどうかははっきり分からないが、昨日午帥から手紙が来て、やはり私の書籍を買うことを言及した。但し目録は未完成であるかぎり、値段の相談はできない。宋槧全蔵の六千余冊だけは、特別扱いにしている。

（『藝風堂友朋書札』上海古籍出版社1980年）

この手紙の中に「香帥」は張之洞（香濤）を指し、「午帥」は端方（午橋）を指す。二人とも都督なので、清人の習慣で「帥」と呼ぶ。この手紙を書いた年代は、手紙に「今香帥雖入都」があることから、清光緒三十三年（1907）張之洞入閣の年だと分かる。この前年或いは少し前に楊氏は始めて書籍を整理してもらい、目録を編集し、二部を抄録した。但し、この目録に楊守敬は満足できなかった。これは手紙の中に「其中重複缺漏、皆不可用」、「此非守敬親自費數月之功、不能清楚」と書いてあることから察知できる。実際楊守敬が時間をかけて蔵書目録を編集したかについては考察できないが、光緒三十三年（1907）に既に一部の目録が存在したことは明らかである。しかもこの目録の編纂は武昌で完成したと思われる。と

いうのは、この時に楊氏は既に武昌の菊湾に移住し、書樓も建てられたからだ。

楊守敬の年譜によると、楊氏は光緒二十五年（1899）に当時湖廣総督張之洞の要請を受け、黄崗を離れ、武昌に両湖書院の教習に就任した。光緒二十八年（1902）、書院は学堂に改め、別に勤成学堂を成立した。楊守敬は武昌勤成学堂の総教長に就任した。しかし、この期間に楊氏蔵書の数の多さと、武昌での住居が荒けずりだったので、年譜にも次のように書いてある、「而議築学堂於花園山、余因買横街舖屋暫居。九月、買菊湾破屋。略修飾而移居焉」（…そこで花園山に学堂を建てることを検討し、私はそのため街の舖屋を買い、暫く住んだ。九月に菊湾で見窄らしい家を買ひ、少々修飾してここに移住した）。このような居住の条件では、楊氏蔵書は武昌には運搬できなかった。これは彼の個人研究にとっても、本の収蔵にとっても大きな不便をもたらした。それで、光緒二十九年（1903）、楊氏は菊湾で書樓を建てた。この書樓ができてから、楊氏の主要な蔵書は黄崗から武昌に移るはずであった。この後、宣統元年（1909）、菊湾の家を修理した。これについて楊守敬は年譜で多少言及した。「菊湾老屋朽壞將傾、改作至十二月成」（菊湾の老屋は朽ち壊れ、傾こうとした、修理作業は十二月までに完成した）。いわゆる老屋は前買ったという「菊湾破屋」を指すが、それに対して新屋があるべく、つまり新修した書樓である。勿論、書籍が遷移する際に目録の編纂をする事は非常に便利である。よってこの時に楊氏が人に頼んで書籍目録の編纂をする可能性は非常に大きい。しかも、この目録の編纂は黄崗の隣蘇園から始まり、武昌の菊湾樓で完成する可能性も非常に大きい。

以上述べてきたなか、楊氏蔵書は1907年に既に蔵書目録があったこと、これは楊氏が人に頼んで編纂したこと、また楊氏自ら目を通してこれを気に入らなかったことと、湖北省博物館所蔵の『隣蘇園蔵書目録』の明確な紀年は1909年であることなど現在把握している資料から、この時期に完成した蔵書目録は確かに現在湖北省博物館所蔵の『隣蘇園蔵書目録』であることが言える。

この目録の編纂は満足するようなものではなかったにしても、今日においてその価値は極めて重要である。というのは、現存する楊氏蔵書の目録で、これが最も基本的なものであり完全なものだからである。内容が完全であることは、他の目録とは比べられないし、これを通じて楊氏蔵書の全貌を把握することができる。一方では、この目録の編纂時期は最も早く、楊氏が日本から持って帰った書籍の数量についてよく把握できる。この他、この目録から楊氏蔵書の散逸の状況も多少窺える。例えば某氏に売却したなどの注釈。前述した、楊氏蔵書の一部分は既に各地に散逸したが、その中の日本の経籍文書の行方についての調査もこの目録に頼るしかない。

結 語

楊守敬が書籍を収集した時期は、ちょうど日本の明治維新时期に当たる。楊氏はこの時期に日本からこんなにも大量の中国古籍を収集して、中国に持って帰ったことは、その功績はいうまでもない。楊守敬先生から始まった、日本に流入する中国古籍に対する研究は、現在も

続けられ新しい成果を挙げた。中国に流入する日本の古籍に関する研究も中国で行われ、ある程度の成果を挙げている。今まで、一般的に楊守敬が日本から中国古籍を持って帰ったことは認識されているが、楊守敬は日本から散逸した日本の古籍をも収集し、特に日本の巻物の経籍、文書を収集したことはあまり知られていない。この意味から言えば、楊守敬先生が中国文化だけではなく、日本文化をも保存したといえる。楊氏蔵書の散逸は、楊守敬自身の言葉でいうと、

典籍散佚、則非独吾之不幸、亦天下後世之不幸也。

典籍の散逸は、私個人の不幸に止まらず、天下、後世の不幸にもなる。

近世以来、世界的に近代化に進む過程の中、東方の国々にとって、伝統文化は強く衝撃を受けたことにもなる。中国がそうであり、日本もそうである。東方の各民族、国家のたくさんの文物典籍はこのような大きな衝撃の背景下に各地に流失した。これについて調査することは極めて重要な、有意義な仕事であると同時に、各国の学者が協力しあって進むべき仕事でもある。

主要参考文献

1. 『隣蘇老人年譜』、湖北人民出版社『楊守敬集』、楊守敬編纂、1911年11月11日。1915年1月9日楊氏逝去したあと熊会貞がこれを続けて完成し、同月26日完成、刊行印刷する。
2. 『楊惺吾先生年譜』、吳天任編纂、1974年、台湾藝文印書館出版。

《邻苏园藏书目录》及其研究

唐 刚 卯

湖北省博物馆

杨守敬，字惺吾，号邻苏，湖北宜都人。生於清·道光十九年（1839年）卒於民国四年（1915年）。是著名的历史地理学家、古籍版本学家、书法家、藏书家。著有《日本访书志》、《留真谱》、《水经注疏》、《历代舆地图》等；主持过《古逸丛书》的出版编辑工作。

《邻苏园藏书目录》共十册。湖北省博物馆藏品。线装墨书手抄本，长29.5厘米，宽18厘米。所用为邻苏园专用印刷稿纸，每纸印有红格，分上下两栏，共八格。栏长20厘米，宽16厘米。格宽1.9厘米。目录未注明编撰者，笔迹非杨守敬所书，但有少量杨氏批注。从所用为“邻苏园”稿纸分析，编撰者应为杨氏学生、家人。从书中体例按具体的楼如“前楼”；按具体的柜如“柏木柜”编写的情况，可知清点、登记的原始地点是在湖北黄冈任职时的杨氏宅邸，即邻苏园。此园因邻近唐宋八大家之称苏轼贬居黄州时吟诵《赤壁赋》的东坡赤壁而得名。杨氏由于此园之故，晚年又号为“邻苏老人”。

《邻苏园藏书目录》全书分为书籍部、佛经部、字画部、法帖部等各部分。但在编辑中又没有完全按照这个体例编目。其中如书籍部虽力图按经、史、子、集分类编目，但由于书籍原来未按经、史子、集四部存放，而具体编目时是按存放地点，分开来整理的，只能以某楼、某柜、某箱进行登录。这样，按四部分类的方法，又不得不各行其事，按千字文加以编号。所以在体例上，存在很大问题。从其中内容屡有修改而言，说明此为底稿本。编辑的目的，在於清理藏书，以便于日常使用。目录具有书籍出入帐的性质，此点可以从目录中众多的记号：“、”、“0”或朱“、”、“0”示意核对以及大量加注中看出。又如第一册书籍部中有：“已卖”、“取来”、“蒯光典借去”、“已带京”、“辛亥（应指1911年）冬月（11月）卖于傅沅叔60元”等注文。

为强调某书的重要或特点，《邻苏园藏书目录》专门刻有“古钞本”、“初印本”、“宋本”、“元本”、“足本”、“明刊本”、“明仿宋本”等木图章分别朱印加盖。其中“日本古刻本”、“日本古钞本”两方木图章专门对来自日本的刻本或抄本加盖朱印。但实际使用中并未对应该加盖的书籍全部加盖。如第一册书籍部有的虽然墨书注明“元至顺乘玉篇”、“元乘玉篇”等，但未加盖“元本”朱印。

注文中许多有明确纪年，最早如“己酉（应指1909年）虫月卖于萃文斋”（此注两见）、最晚“送买于甘翰臣 壬子（应指1912年）十月刀（初）一”。表明其编撰年代应早於己酉年，即1909年，而至少在1912年仍在使用的。

一、扬氏藏书的经历

扬氏作为藏书家开始於清·光绪六年（1880年）四月作为清政府驻日使馆随员赴日本东京任职期间。当时日本正值明治维新时期，由于当时日本的社会风气对于本国古代文化不甚重视，因此各种古籍充盈于日本市场，贱价出售。如杨氏在所撰《日本访书志》缘起中所述：

日本维新之际，颇欲废汉学，故家旧藏，几於论斤估值。

又如袁同礼《观海堂书目序》中所述：

（日本）举国士大夫，弃古书如敝屣。

在此情形之下，同年十二月杨氏在致友人李蕤客的书信中说到“日本古籍甚多，所见有唐人写本《玉篇》，又有释慧琳《一切经音义》，隋杜台卿《玉烛宝典》，皆钞本，其馀秘笈尚夥。隋唐以下金石文字，亦美不胜收。彼国自撰之书，与中土可互证者尤多”。遂有志於搜集中国古时逸佚之书。当时中国文人学士闻其言，如李慈铭自述“闻之神往，有怀铅浮海之思”。同时又有闻其言而加以鼓励者，如黄遵宪《日本杂事诗》自注：“先是，先生（指杨氏）初至日本，嘉应黄公度方任使馆参赞，告以中土珍本古籍，唐抄宋刻，时复邂逅相遇，劝其留意搜辑，先生因有日本访书之学”。在杨氏自撰年谱中，杨守敬先生回忆：

先是，余初到日本，游於市上，覩店中书多所未见者虽不能购，而心识之。幸所携汉魏六朝碑版亦多日本人未见，又古钱古印为日本人所羨，以有易无，遂盈筐篋。及黎公有刻书之议，则日日物色之，又得森立之《经籍访古志》抄本。其时立之尚存，乃按目索之。其能购者，不惜重值，遂已十得八九，且有为立之所不载者数百种，大抵医书类为多，小学次之。於是黎公择取付梓人，嘱守敬一人任之，守敬日与刻工磋，又应接日本文学士，夜则校书，刻无宁日，日本诧为万夫之稟，且上新闻报中。是时，与日本文人往来最密者严谷修（一六）、日下部东作（鸣鹤）、冈千仞（振衣）。

此后，杨守敬先生即在日本将主要精力投入於古籍的收藏以及出版工作。他在所撰《日本访书志》缘起中写道：

余生僻陋，家（钞）藏书，目录之学，素无渊源，庚辰东来日本，念欧阳公百篇尚存之语，颇有搜罗放佚之志，茫然无津涯，未知佚而存者为何本，乃日游市上凡板已毁坏者皆购之，不一年，遂有三万馀卷，其中虽无秦火不焚之籍，实奄然未献之书。

杨守敬在多方搜集古籍的同时在清朝政府驻日本公使黎庶昌的支持下进行了古籍的整理出版工作。光绪十年由他实际主持的《古逸丛书》在日本刊刻完成，包括保存於日本的中国古籍二十六种，凡二百卷，在海内外引起轰动。如杨氏自撰年谱所述“古逸丛书已成，督印百部，黎公以赠当时显者，皆惊为精绝”。又见金武祥《粟香三笔》所述：当时对《古逸丛书》视之“竟无殊於奇珍异物，必得而后已”。后杨氏又据在日访书经历，开始撰写《日本访书志》与《续志》的底稿本。在此期间杨氏感叹万千，据《杨惺吾先生年谱》（吴天任撰写1974年台湾艺文印书馆出版）转引容肇祖《杨守敬小传》中所载给友人黄萼的书信中杨氏写道：

学问一事，敬以前皆毫未闻，自来此因纵览数万卷书，始知此中门径，所刻书二十馀部，又为日本访书志廿馀卷，若明年无他故，此身必当有五百年之称，惜未得与仁兄朝夕相见，同此乐也。弟现在所藏书已几十万卷，其中秘本，亦几万卷，就中有宋板藏书，可以相并，其他皆不足言也。自幸此身有此奇遇，故一切富贵，皆漠不关怀，计明年之冬，当返国赴黄冈任，他日必邀仁兄一赏奇也。

信中所说“弟现在所藏书已几十万卷，其中秘本，亦几万卷”。可见杨氏在日本所搜集的古籍已是数量惊人。至光绪十年（1884年）杨守敬“四月差满，五月束载所得古籍归国”。归国后，返回湖北黄冈担任教谕一职。其所藏古籍也运抵黄冈。光绪十四年（1888年）杨氏在黄冈专门修筑藏书楼。此事见於其自撰年谱：

戊子、五十岁。筑黄州[邻苏园]以藏书，其城北即东坡赤壁，故以名。

此后杨守敬自号邻苏老人。但邻苏园内所修藏书楼另有名号，称为“广文书楼”，见陈三立《宋槧黄山谷内外集题辞》：

光绪十九年，……其秋，游黄州诸山，遂过杨惺吾广文书楼，遍览所藏金石秘籍，中有日本所得宋槧黄山谷内外集，为任渊史容注，据称不独中国未见，於日本亦孤本也。

而当时杨氏其藏书的规模有“三百架”之称，足见其藏书规模。见周伯晋《过黄州宿杨惺吾邻苏园书楼》诗：

宋槧唐雕三百架，独专尤物时人骂。兴来偃笔作狂书，行歌乱石荒花下。西山如客揖书楼，楼上老儒无所求，何须蹀躞金门道，得住高楼吾既休。

综上所述，杨守敬先生藏书主要来自日本。其经过已略述如前，其中有从中国流入日本的中国印刷的古籍，但也有日本印制或抄写的中国古籍与本为日本的古籍。如杨守敬撰《日本访书志》：

余在日本所得古钞佛经不下六七百卷，其中有唐人书写者，有日本人转录者，工拙不一；而时有出於高丽藏、宋藏、元明藏之外，有岛田 等好佛书，为言：此皆其日人人唐求法僧所国者。

二、杨氏藏书的流向与流散

杨氏藏书在清光绪十年（1884年）杨守敬“五月束载所得古籍归国”。所藏古籍运抵黄冈。光绪十四年（1888年）“筑黄州[邻苏园]以藏书”已见前述。此为杨氏藏书归国后的第一处地点。

又据杨氏自撰年谱，杨氏在光绪二十五年（1899年）应当时湖广总督张之洞的邀请，离开黄冈转赴武昌任两湖书院教习。光绪二十八年（1902年）“是年，改书院为学堂，而别立勤成学堂。遂转任武昌勤成学堂总教长。但在此期间，杨氏藏书因数量太多，加上居屋简陋，自然无法将书籍运至任所一武昌。如自撰年谱所述：

“……而议筑学堂於花园山，余因买横街铺屋暂居。九月，买菊湾破屋。略修饰而移居焉。

在此居住条件下，杨氏藏书无法运至武昌，对其个人研究与收藏都带来不便。于是在光绪二十九年（1903年）杨氏在“菊湾起书楼”。此书楼盖成后，杨氏的主要藏书便应顺理成章由黄冈转往武昌收藏。此后在宣统元年（1909年）又对菊湾房屋进行了修缮。其自撰年谱略述其事，所谓“菊湾老屋朽坏将倾，改作至十二月成”。所谓老屋当指原购“菊湾破屋”，而相对而言必有新楼即新修“书楼”。

综上所述，杨氏藏书已在1903年前后，转运至武昌菊湾收藏。此为杨氏藏书归国后的第二处地点。

1911年武昌起义，武昌城内秩序出现混乱。杨氏出行上海，武昌杨氏藏书只得托人代为保管。据陈三立《宜都杨先生墓志铭》：（杨守敬）“岁辛亥，武昌祸起，跳出走上海，鬻书为活”。而其自撰年谱有较详记述：云：武昌起义发生后，“有劝远避者，……吾书籍甚多，万不能迁出；况民军示文，秋毫不犯，遂坚持不出城主意”。但十月十二日即遭持枪歹徒胁迫钱财。遂不得已仓促逃往上海。“而以家中书籍、衣物等件交付旧仆数人看守”。及抵上海“乃知日本寺西秀武请於黎都督，已有保护吾家书籍告示粘贴门首，并加封条於室内”。兹将年谱

所记此告示文字（部分）附记如下：

照得文明各国，凡於本国之典章图籍，罔不极意保存，以为国家光荣。兹查有杨绅守敬藏古书数十万卷，凡我同胞均应竭力保护，如敢有意图损毁及盗窃者，一经查觉，立即拿问治罪。杨绅系笃学老成之士，同胞咸当爱敬，共尽保护之责，以存古籍而重乡贤……。

由上可知当时武昌军政府对于中国传统文化的保护政策。因此而杨氏藏书得以无恙。但其时南、北二军在武汉隔江对垒。杨氏对此深为忧虑，其感叹之言见于自撰年谱：

……吁！世之藏书者，大抵席丰履厚，以不甚爱惜之钱财，或值故家零落，以贱值捆载而入，守敬则自少壮入都，日游市上，节衣啬食而得；其在日本，则以所携古碑、力始能入厨者。天鉴艰难，当不使同绛云一炬！若长此不靖，典籍散佚，则非独吾之不幸，亦天下后世之不幸也。涕零书此，知我者，其勿以不达笑我。

于是杨氏藏书在1912年“并将所藏图籍一切运沪”。藏书地点从杨氏藏书又有“观海堂”之称来看，可能在沪上时，杨氏藏书度藏於上海的“观海堂”。此为杨氏藏书归国后的第三处地点。据杨氏自撰年谱：“丙午、六十八岁四月至上海，寓甘君翰臣家。时翰臣为怡和洋行总办，酷爱余书法”。可知甘翰臣与杨氏关系。杨氏到沪，定是住在甘家无疑。但书籍到后情景如何？待考。

民国建立之后，1914年杨守敬任参议员到京。据吴天任撰写的《杨惺吾先生年谱》（1974年台湾艺文印书馆出版）：

先生常以名山之业为念，因将在沪藏书，次第运京，费用由政府资之。在京寓西城南魏胡同。

可知杨氏藏书此时在当年政府的帮助下，运抵北京。度藏於“南魏胡同”。此为杨氏藏书的第四个地点。此后，1915年杨守敬先生去世。

在1919年先生卒后四年。据前引年谱：“先生之观海堂藏书，以傅沅叔之介，鬻诸政府。”此事何澄一编撰的《故宫所藏观海堂书目》（民国21年北平故宫博物院图书馆印行）所载袁同礼的序言中有较详细的叙述：

我国久佚之书，赖杨氏之力，复见于中土，则杨氏保存古籍之功，殊不可没也。民国乙卯，杨氏归道山，享年七十有六。其藏书全部以国币三万五千元鬻诸政府。己未，徐总统以一部份拨交松坡图书馆，所馀者储於集灵囿，丙寅一月，拨归故宫博物院保存，

藏於大高殿，为故宫图书馆分馆。己巳冬移於寿安宫，专室度藏，公开阅览。今就故宫所藏者由何君澄一编成简目，聊备稽考而已。窃念此录虽非观海堂藏书之全部，然所著录为其他书目所不及者有二：一曰：古钞本，二曰：医书。日本所传古钞本，多存隋唐之旧，其价值当出宋元旧刊之上，今岿然独存，而为一般收藏家所未见。至医籍秘本，大抵皆小岛学古旧藏，学古三世以医鸣於日本，藏书之富，罕有其匹。今观其所收者，多为各书目所未载，宁非书城之巨封，文苑之宝藏耶？

虽然如此，杨氏藏书并未能得到完整保存。一部份归於“松坡图书馆”，这一部份应该是当时学者所认为的一般书籍；另一部份归於故宫博物院，原在“大高殿”，后在“寿安宫”。这一部份当是杨氏藏书的精华所在。

解放前夕，原度藏於故宫博物院的书籍运往台湾，现藏於台北故宫博物院。松坡图书馆的书籍归於中国的国家图书馆——北京图书馆。但据了解，现已分散於各种分类之中了。

以上所述为杨氏藏书的大体流向。需要特别指出的一点是，在杨氏过世之后，杨氏后人并未将杨氏藏书的全部卖给当时的北洋政府，实际上家中仍保留了部份古籍，特别是手抄卷子本古籍与文书。这一部份在1965年前已有流出。至1965年后，杨守敬先生的孙子杨先梅先生将家中所存的其余古籍全部捐赠给了湖北省博物馆。

综上所述，杨守敬先生的藏书，即如杨氏自述的“一切富贵，皆漠不关怀”，“节衣啬食而得”，“天鉴艰难”所搜集的藏书，在杨氏在世时曾历经迁徙、战火之险，藏书地点四易其地。在杨氏过世之后，二分於两岸各地，而其中散失者又有许多今已不可见。感慨之情岂不如杨氏所云：“涕零书此”。

总之，有鑑於以上情节，對於了解杨氏藏书之详情亟待於杨氏藏书之书目的编撰，自不待言。

三、杨氏藏书目录的编撰

尽管杨氏藏书从一开始便受到世人瞩目，但杨氏藏书虽丰，却一直未能编成自己能够满意的目录，更未公布。因此在杨氏在世时一般人不得其详。在杨氏过世之后始有人得窥奥堂，着手编著目录。兹将杨氏藏书目录的编撰情形叙述如下：

目前已公开刊行杨氏藏书目录仅一种：

袁同礼序，何澄一编《故宫所藏观海堂书目》

民国21年北平故宫博物院图书馆印行

或可管中窥豹的其它书籍有如下几种：

- 1、《古逸丛书》二百卷。光绪十年（1884年）
- 2、《日本访书志》十六卷。光绪十年（1884年）成，二十七年（1901年）刻
- 3、《留真谱》十二卷、《续编》十二卷、光绪二十七年（1901年）刻
- 4、《日本访书志补》王重民据故宫图书馆藏辑（1930年）铅印

综上所述，诸目录因各种原因均非完整，如《古逸丛书》，《日本访书志》中可能有一定数量的古籍并非属杨氏所藏；又如《留真谱》等可基本上肯定属于杨氏所藏，但所载古籍数量很少。总之，均无法窥见杨氏藏书全豹。而《故宫所藏观海堂书目》虽然比较全面，但亦非全部藏书；并不包括藏於松坡图书馆的那一部份，而且也不可能包括杨氏家中未出售的部份。

在研究杨氏藏书目录时，首先需要指出的一点是杨氏在目录未编之前，在日本时已经对其藏书的最主要部分进行整理，撰写出了《日本访书志》等书稿本，已见前述。到了光绪二十三年（1897年）五十九岁时，杨氏又重操“旧业”，开始对其藏书进行整理。见其自撰年谱：

六月，归黄州〔邻苏园〕。……自是又理旧业，检点藏书，拟刻《日本访书志》及《留真谱》。

在他归国后13年，杨氏方有暇正式开始清理藏书。此项工作又历经四年，至清光绪二十七年（1901年）《日本访书志》刻成。《留真谱》也在同年刻印出版。但杨氏藏书仍然未编成完整目录。后来，由于希望将书卖出之故，开始编辑藏书目录。见杨守敬致缪荃孙（艺风堂）书：

……再敞处书籍，去冬香帅欲购之，嘱抄目录。因敞处书凌杂之甚，嘱人检理，竟不得端绪，故至今已抄得两分，其中重复缺漏，皆不可用。此非守敬亲自费数月之功，不能清楚。今香帅虽入都，其作罢论否，尚无明谕。昨日午帅信来，亦言及欲购我书，但目录未成，万难议价，唯有宋槧全藏六千余册，是特别度阔。

（《艺风堂友朋书札》上海古籍出版社）

信中“香帅”是指张之洞（香涛），“午帅”是指端方（午桥），因为他们都担任都督一职，清人习俗称之为“帅”。写此信的时间，据信中“今香帅虽入都”语，可知应为清光绪三十三年（1907年）张之洞入阁当年。在这一年或稍前杨氏始“嘱人检理”编辑目录，并“已抄得两分”。但此目录并不能使杨守敬满意，如信中所述“其中重复缺漏，皆不可用”。又云：“此非守敬亲自费数月之功，不能清楚”。关于杨氏是否“费数月之功”编撰其藏书目录已不可考。但在光绪三十三年（1907年）已有了一部目录则是十分清楚的。而这部目录的编写完成应是在武昌，因为此时杨氏早已移居武昌菊湾，并已盖有书楼。

据杨氏自撰年谱，杨氏在光绪二十五年（1899年）已经应当时湖广总督张之洞的邀请，离开黄冈转赴武昌任两湖书院教习。光绪二十八年（1902年）“是年，改书院为学堂，而别

立勤成学堂。遂转任武昌勤成学堂总教长。但此期间，杨氏藏书数量太多，加上居屋简陋，如自撰年谱所述：“而议筑学堂於花园山，余因买横街铺屋暂居。九月，买菊湾破屋。略修饰而移居焉。”在此居住条件下，杨氏当然无法将书全部运至武昌，因而对其个人之研究与收藏带来不便。于是在光绪二十九年（1903年）杨氏在“菊湾起书楼”。此书楼盖成后，杨氏的主要藏书便应顺理成章由黄冈转往武昌收藏。此后在宣统元年（1909年）又对菊湾房屋进行修葺。其自撰年谱略述其事，所谓“菊湾老屋朽坏将倾，改作至十二月成”。所谓老屋当指原购“菊湾破屋”，而相对而言必有新楼即新修“书楼”。在书籍进行搬迁之际，对于编写目录当然非常有利。因此在此时由杨氏委托人进行书籍目录的可能非常之大。而且始於黄冈之邻苏园，完成於武昌菊湾书楼的可能亦非常之大。

综上所述，从杨氏在1907年已有了藏书目录而言；从杨氏前面所说的这是一本由杨氏托人编撰完成的，并由杨氏亲自过目而不能令人满意的目录而言。再则，从湖北省博物馆藏《邻苏园藏书目录》中的明确纪年为1909年为最早而言；从这本目录曾令观看者非常的不满意，这本《邻苏园藏书目录》中甚至于可见整面被划上，批注“拆烂污”之类的话而言；起码从目前所掌握的资料而言。均非湖北省博物馆藏本《邻苏园藏书目录》莫属。

虽然这本目录的编撰不能叫人满意，但其价值在今天仍然十分重要。因为据目前所知，杨氏藏书的这本目录乃最为原始，最为全面的一部。这种意义的一方面是内容全面，为其它目录所无法比拟，因此从中可以得知杨氏藏书的全貌。这种意义的另一方面在於这部目录的编辑时间最早，从中可以了解，杨氏从日本所带来的书籍数量。此外，目录对杨氏藏书的散失情况有所反映，如卖给某人之类。如前所述的杨氏藏书中的一部份已经散失於各地，有的日本经籍文书有等於这本目录查寻。

结 语

杨氏藏书之际正当日本明治维新时期，杨氏在此之时从日本搜集了如此数量的中国古籍归国，其功业如山。由杨守敬先生开始的对中国古籍流入日本的研究，在今天仍然有人在做，并取得了新的成就。对于日本流入中国的古籍的相关研究在今天中国也有人在做，也取得了一些成就。在过去，一般人只知杨守敬先生从日本带回了中国古籍，而并不知杨守敬先生也从日本市场上购买了日本散失於市的日本古籍，特别是日本卷子本的经籍文书。从这个意义上说，杨守敬先生所保存的不仅是中国文化，也保存了日本文化。但杨氏藏书的散失如杨氏在所藏书籍有虞之时所言：

典籍散佚，则非独吾之不幸，亦天下后世之不幸也。

近世以来，在世界走向现代化的进程中，对于东方国家而言，传统文化受到了强烈的冲击，

中国如此，日本也是如此。东方各个民族、国家的许多文物典籍在这冲击的大背景下流散各地。对此进行调查，是一项重要的工作，一项非常有意义工作。同时也是一项需要各国学者共同进行的工作。

主要参考文献

- 1、《邻苏老人年谱》湖北人民出版社《杨守敬集》杨守敬自撰於辛亥（1911年）十一月十一日。熊会贞续成於1915年一月九日
杨氏作古后同月二十六日，并刊印。
- 2、《杨惺吾先生年谱》吴天任撰写1974年台湾艺文印书馆出版。